

第11回教育懇談会議事録

日時：平成27年9月14日（月）13:30～15:30

場所：愛知県三の丸庁舎 アイリスルーム

<大村知事>

皆様、こんにちは。大村秀章です。本日は、お忙しい中にも関わりもせず、第11回目となりました教育懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今回は、特別参加として、漫画家の江川達也様にご出席をいただきありがとうございます。皆勤賞ですね。愛知の教育にかける愛情を私は感じますけれども。また、引き続き辛口のご見をよろしく願いいたします。そして、本日は、もうお一方、1984年、1988年のロサンゼルス、ソウルと2大会連続でオリンピックの水泳競技、平泳ぎ種目に出場され、また、2000年のシドニーオリンピックでは、競泳の日本代表コーチも務められておられます、中京大学教授、スポーツ科学部長の高橋繁浩様にご出席をいただきました。よろしく願いいたします。この間の世界水泳でも解説をされておられましたね。また、引き続きよろしく願いいたします。

また、前回、3月24日に開催しました第10回懇談会では、「子どもの可能性を引き出すための教員の資質向上」を議題に、ご議論をいただきました。

皆様からは、教員が教育に専念できる環境を作るべき、ということとか、教員それぞれに合った教育プログラムを作っていくことが重要といったご意見などをいただきました。

いただいたご意見は、今年度作ります「教育に関する大綱」、「第三次教育振興基本計画」の参考とさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

さて、本日の懇談会の議題は、「子どもの体力向上や競技力の強化など、あいちのスポーツ振興」についてでございます。

文部科学省が実施をしております「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によりますと、子どもの体力は、昭和60年頃をピークに長期的に低下傾向にあります。最近も低下傾向に歯止めがかかってきておりますが、ピーク時と比べると、低い水準にあるということでありまして、また、平成26年度調査によりますと愛知県は小学校5年生の男女ともに得点平均が全国平均を大きく下回っておりまして、子どもたちの体力向上が喫緊の課題となっております。これは大都市県がだいたい悪いのかな。人数が多くて遊ぶ場所が少ないとなるとどうしても平均から低くなるということだと思いますが、現状はそういうことでございます。

その中で、2020年の東京オリンピックに向けて、愛知ゆかりの選手を多く輩出していくためには、中学生、高校生など若い世代における競技力の強化も必要だというふうに

思っておりますし、本日の懇談会では、こうした、子どもたちの体力向上の取組やスポーツを楽しむことができる機会の充実、2020年東京オリンピックに向けた競技力の強化など、スポーツ振興の方策について、ご意見を伺ってまいりたいと考えております。

皆様には、大所高所から、またご専門のお立場から、率直な、忌憚のないご意見をいただくことをお願いいたしまして、私からのごあいさつとさせていただきます。今日は何卒、よろしくお願いいたします。

〔事務局から出席者紹介〕

<大村知事>

それでは、懇談会に入らせていただきます。

まずは、お手元の資料につきまして、事務局から簡潔に説明いたします。

〔事務局から資料説明〕

<大村知事>

それでは、皆様からご意見を伺ってまいりたいと思います。

まずは、ただ今の説明にありました、子どもの体力を向上させるためにはどうすべきかということ、それから、スポーツを楽しむことができる機会の充実、また、2020年東京オリンピックに向けた競技力の強化などの方策はどうすべきかなど、あいちのスポーツ振興につきまして、ご意見を伺ってまいりたいと思います。

それでは、名簿の順に、江口様からお一人8分程度でご意見を伺ってまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

はい、よろしくお願いいたします。今日のテーマ、最初に子どもの体力の向上ということでございますけれども、子どもの体力を向上させるためには、運動に親しんでもらわないといけないんですけども、運動を子どもたちがいっぱいしてくれるかどうかというのは、ポイントとしては二つあると思います。

一つは、まずは運動を好きになるかどうか。好きじゃないとやろうという気にならない。まず、好きになることが第一であって、好きな子を増やし、かつ、もう一つのポイントというのは、スポーツをやる環境が整っているかどうかと。この両方のレベルが上がっていくとですね、子どもたちはいっぱいスポーツをやってくれて、体力が上がっていくんだらうというふうに思います。

その点で言いますと、先ほど事務局の方からご説明いただいた資料の12ページです

ね、これが大変関心があるところなんですけれども、この平成26年度の全国体力運動能力、運動習慣等調査、ここで運動が好きな子がどのくらい体力テストで点数があるかと。好きな子がスコアが高いのは、ある種当然と言えば当然だと思うんですけれども、一番気になるのが、この好きという割合が、他県と比べて愛知県がどうなのかということころです。その点についての事務局さんからご説明がなくて、私、ちょっとこの調査だったかどうか分からないんですけれども、もしかしたら都道府県別に好きの割合っていうのを分析が出てなかった調査だったんじゃないかな、という記憶が何となくあるんですけれども、また、もし後でお分かりになれば、好きの割合が愛知県が全国の中でどのくらいのポジションにいるのかということをお教えいただきたいんですけれども。

実は、私、何年か前に同じような調査をやったことがあります。それがどういう調査かということ、都道府県別に教育力の比較をするということをやしまして、いろいろな項目が、それは元データとしては文科省の全国学力学習状況調査、あれのテストじゃない方、アンケート調査ですね、生活習慣ちゃんとやっていますかと。そちらの調査項目の中から、その道徳的な項目とか、生活習慣の項目とか、意欲の項目とかという質問事項を拾って、それを他県と比較して、総トータルで都道府県別に順番をつけたということをやっております。

その中で、実は平成19年の調査で、スポーツについて調べた結果がございます。その平成19年の学力調査におけるスポーツ関連の質問項目が3つございまして、一つは、「外に出て遊んだり、運動・スポーツをして体を動かしていますか。」という、「はい」とか「まあまあやっている」とか、選択肢で選ばせる。二つ目は、「平日1日当たりどのくらいの時間、運動・スポーツをしていますか。」と。体育の授業以外に。三つ目が「スポーツをすることが好きですか」ということで、この三つの調査を他県と比較をしました。

その時の結果、平成19年ですからちょっと前の数字になるんですけれども、愛知県はどのくらいのポジションにいたかと申しますと、だいたい平均よりちょい下ぐらい、「外に出て遊んでいますか。スポーツをしていますか。」というのが、全国で29番目、「平日の運動時間」が全国で27番目、「スポーツをすることが好きですか。」も、全国で27番目と。全国でちょい悪いくらいなんですけれども、このところを上げていくということが、すごく重要になるんじゃないかなというふうに思います。

特に、まずは、好きかどうか。好きかどうかという部分で言いますと、実は意外な結果がありまして、同じ調査なんですけれども、東京都の小学6年生の子に、スポーツ好きかどうかと。好きの順位が全国で東京都12位なんです。大都市圏だから、スポーツする環境がなくて、ないから好きじゃないだろうとなんとなく思ってしまうんですけれども、好きかどうかという部分で言うと12位、だけでも、実際にやっているかとか、やっている時間とか、そういう部分になると、ストーンと落ちて、やっている順位で言

うと、東京都は下から2番目、46位。1日当たりの時間ですと29番目で、これはそう悪くない。愛知県とだいたい二分くらいという感じであります。ですから、まず、好きかどうかということにフォーカスをして、データをもうちょっと深くいろいろと見ていくと、意外なことが分かるんじゃないかなというふうに思いました。

二つ目の点でございますけれども、私、実は住んでいるのは岐阜県です。岐阜県と愛知県のスポーツに関する教育、スポーツ関連のところで大きな違いというのは、岐阜県というのは、今、ほとんど小学校では部活動がなくなりました。愛知県も、昔は結構あって、だんだん減っていると思うんですけれども、それでも、まだ愛知県の場合、まだ小学校の部活動がそれなりに残っているようです。それで、岐阜県はどういうふうにしたかという、事務局さんからのご説明の最後のページですね、総合型地域スポーツクラブ。こちらにものごくシフトをされましてですね、学校では部活をやらない。その代わり学区単位、まあ中学校の校区単位ぐらいで、スポーツ少年団をコアとして、大人のスポーツ活動を含めたような、こういうスポーツクラブというのを作って、そこで週末に活動しているというような形になっております。

ここの20ページのところの課題にまさに書いてあるんですけれども、確かに総合型地域スポーツクラブというのは、人材とか指導者の不足が深刻であると書いてありますけれども、でも小学校の部活みたいに学校の先生がふらっと来て、適当に教えてというのと比べればはるかに、地域の中で野球が好きな人、陸上をちゃんとやってきた人というのが面倒を見てくれますので、指導のクオリティとしては、明らかに上がると思うんですけれども、ただ、うちの子もなんかを見ていてすごく感じますのは、小学校で授業が終わった後に、校庭に誰もいなくなってしまう。部活やっていると、野球部とかサッカー部とかの子が運動場に出て、わあーといろんなことをやって、ということを常に目にすることによって、「ああ、自分もこの小学校で運動部入って一生懸命頑張ろうか」という気持ちが上がってくる、という側面はあると思うんですけれども、そのスポーツの部分からパシッと切れて、週末でどこか専用のところで、いうことになってしまったが故に、普通の子ども、そんなにスポーツに関心がないような子がですね、スポーツの中に取り込まれなくなっているということがあるように思います。

ですから、私は結論めいたことまでは言えませんが、まさにこの20ページの下のところですね、総合型スポーツクラブを強くしていくのはいいんですけども、そのところで、学校とどう関わりを持っていくのかということが、一つ大事なポイントになってくるんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと、とりとめの話になりましたけれども、以上でございます。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

今日の資料をいただいて思ったことは、愛知の子どもたちが全国平均より運動能力が

下回っているのは何故だろう、由々しき状況だということです。それから、子どもたちは運動する子としない子に二極化していること、これも何故なんだろうと思いました。これらの問題意識を持ちつつ考えたことについて述べさせていただきたいと思います。

本日のお題は、子どもの体力向上と書かれていますが、国が行っている体力テストで測られているものは、言ってみれば運動能力につながるようなものですよね。体力という言葉自体にこだわれば、本来は精神面も抵抗力も含めた広い概念を持つ言葉だと言えます。よって、こういう定点的に測定されて出てきている体力というのは、人間が生きていく力という意味では限られた部分の内容だと思っています。

だから、広義の体力をつけたいととらえていくのか、それとも調査結果が表しているように運動能力を高めたいとするのか、あるいは、スポーツを振興させたいと思うのか、とりわけ後ろの資料にありましたように、オリンピック選手等の強化選手を育てていくということが必要なのか、どれを主目的にするかによってアプローチは変わっていくだろうと思っています。

とはいえ、先ほど言いましたように、子ども全般については、運動能力が全国的に下がっているので、それによって起こる健康面の弊害について捉えていく必要があると思っています。また、運動能力、狭義の体力の向上を目指すにしても、今、部活動の話がありましたように、うちは教育大学ですから、教科の中で教えている体育の授業というのが注目点かと思っています。

というのは、小、中、高と学習指導要領がありますけれども、その中で体育や保健体育に関わる表現は、「豊かな心や健やかな体の育成」なんですね。現行の前の改訂のときから体育の内容は変わってきています。いわゆる、技能的に高めていく体育の授業ではなくて、「体づくり」とか「体ほぐし」の部分から、自分の体を感覚的にも受け入れて、人との関係を良くしていくというような、技能的な体育ではなくて、コミュニケーションに関わっていくような体育に学習指導要領の中は変わってきています。かつ、ご承知のように、武道というのも入ってきて、日本の伝統とか文化を学ぼうということが入ってきています。

改訂されてきたのは、子どもの実態を踏まえて強化するべき点があるということだと言えます。体育の授業が非常に広範な内容に変わってきていて、中にはチームでプレイすることを通して、どうやったら役割が生まれるかとか、論理的思考を高めるかというのがねらいになってきています。そうすると、先ほど言いましたように、速く走れるとか、高く跳べるとかいう運動技能じゃない部分を、学校の体育や保健体育という教科の中で学ぶということになります。

教科学習がそれなりに変わりつつあるなかで、子どもたちが体を動かすことに対して積極的にならない、成果があまり得られていないのはどういうことなのかなあと思います。自分の専門がそうなので、最近、教育現場の健康教育は見ることもあっても、体育

実技の授業をあまり見学していないことを少し反省したところです。

いずれにしても、子どもたちの運動やスポーツについて学ばせていくために教科の学習があって、その中のポイントは体育、あるいは保健体育の授業になってきます。そこで、授業がねらっていることと、育てていきたい子どもの姿というのが本当に合致しているのかという疑問が生じます。以前に比べて教育内容が広がり、その分、運動能力に長けていない子どもたちもスポーツに親しむことができる、そういう状況が作られつつあることはいいと思います。でも、それでは、オリンピックのときに本当に能力のある子どもたちが吸い上げられているかどうかという課題は残るということを思います。

一昨年のことですが、シンガポールに健康教育のことで小学生の授業を見に行きました。シンガポールでは、知ってのとおり ICT などがすごく進んでいます。健康教育は日本でいう体育の先生が担当していて、体育の授業で跳んだり走ったりというときに、栄養の教育、バランスのよい食事の取り方のような内容をセットにしていました。子どもたちは手首に時計みたいな形のカロリーメーターを着けていて、ダァーと走ると、今の走り方で何カロリーが消費されたかという数字が出ます。そして、どれだけの食事を摂ったらどれだけのカロリーを消費していかなきゃいけないか、自分の今の走りでは全然消費されていない。もっと走らなきゃいけないとか、そういうことをデータとして見ることで、体をつくることとか運動することの意味を、食事とも絡ませながら健康教育という視点でも意識化させていました。それを見たときに、日本は縦割り、教科の中身を分離している傾向があるけれど、融合させている面白い授業だなあと感心して見て来ました。

だから、日本の中でもですね、体づくりだとか、どの子ども能力を伸ばしていくためには、楽しく学べる、あるいは、やることの意味が分かる、そういう授業方法を工夫していく必要があると思いました。その原点にあるのは、就学前の幼児教育の段階なんだろうと思っています。ですから、体を動かしていくことの楽しさみたいなものが、子どもの遊びを含めて保障され、実感があれば、そこが一つの基盤になっていくのではないかと考えています。以上です。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

柴山でございます。専門外なのでちゃんとした回答ができませんが、実は私ども企業でも今、健康経営というのが非常に重要な経営課題となっております、今年の5月に研究報告を出したところです。そこではっきりしていることは、企業で当然毎年1回健康診断をして、その結果を受けた各自がそれぞれ健康づくりに励むということなんです。が、実際はなかなか、健康診断の結果ということで把握をしているんですが、その改善のための行動というところにはなかなかいかないんですね。

これは子どもの運動と全く同じ問題でして、健康づくりのため、言うまでもないです

が、運動と栄養と休養ということなのですが、特に運動については、やっぱり企業の中でも、運動の好きな人はいくらでも運動をする。で、大半の人は運動は嫌いではないですが、なかなか時間を取ってやりたくないのほとんどやられていないです。こういうのが実態でございまして、私どももできるだけ、そういう運動を普段しない人にも運動をしてもらえるように、企業から働きかけをしてもらおうということで研究をしたところでございます。

そこでいくつか、これは企業の中の話ですが、子どもの運動にも少し似ているところがありますのでお話をしたいと思います。運動の好きな方は全く問題がないですね。問題は運動をしなきゃいけないのにしない人、これが圧倒的に多数で、そういう人の問題なのですが、そこで色々我々も議論して、ひとつは運動しなきゃいけない環境というのを無理やり作ってしまう。ある会社では例えばエレベーターを止めてしまっただけで、嫌でも階段の登り降りをせざるを得ない、こういうことをやってらっしゃる企業もありますし、一方で、そうじゃなくてもっと楽しく運動できるように、ゲーム性を持たせて運動をさせる。多分お聞きになったことあるかもしれませんが、各職場のグループごとに万歩計を持たせて、そこで各グループごとに競わせる。ある会社では工場の敷地内に何通りものコースを設定してそこでウォーキングしてもらおうと。こういうようなことも。こちらはどちらかというと無理やりではなく楽しくやらせようということですね。

多分子どももそういった面ではやっぱり、嫌でも歩かないといけないような、昔は1時間も山道を歩いて学校へ通ったなんていう話もありましたが、それは別にしても、やはり嫌でも歩かないといけないような、そういうことも考えなければなりませんし、一方でゲーム性、子どもはゲームが好きですので何らかのゲーム性を持たせて運動につなげていくと、こういったことも考えないと、なかなか運動嫌いとか運動好きじゃない子どもに運動をさせるというのは難しいと思います。

もうひとつ我々が考えたのは、運動を普段しない人でも機会があれば運動するのではないか、ということ。例えば1ヶ月後に社内のゴルフコンペがあるということになりますと、ゴルフでドライバーを少しでも飛ばしたい、そのための運動は、というよりはやはりみんな関心を持ちます。子どもの運動会が2週間後にありますと、運動会で早く走るための運動というとお父さん方こそぞって出る。こういうようなこともありますので、そういう機会を上手に利用するということが、ただ運動しないといけないということでは難しいと私は思っております。

もうひとつ、大人がきちっと運動習慣を身につけないと、なかなか子どもにまで、ちょっと難しいなと思っております。ですから、そういう面では親の関心を高める、私は全く専門外なので、運動と学力の関係がどうなっているのかわかりませんが、私が子どもの頃は勉強ができる子は足が速かったような気がしましたので、そういう運動の効用みたいなものを親御さんに上手に説明をされると親子で運動するような機会も出てくる

のではないかと考えております。

最後に脱線しますが、私、山登りが好きなので度々山に登るのですが、学校登山みたいなことはどうでしょう。登山というものはあまり100m競争のような瞬発的な体力がいるわけでもないので、リーダーがしっかりしていれば誰でも山の頂には立てますし、その頂に立ったときの達成感とか、その間の苦労だとか苦しさ、それを乗り越える嬉しさみたいなものが味わえると思いますので、そういうものをパッケージで楽しめるような行事をやっていただくといいのではないかなと思います。以上です。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

柴山先生の話に続きまして、予備校という立場ではなくて、河合塾学園で幼児期を扱っている名古屋ドルトン（河合塾学園ドルトンスクール）の考え方から少し紹介したいと思います。柴山先生がおっしゃった「日常から」という話をドルトンスクールでもやっていて、その紹介です。ドルトンスクールは運動場が狭いために、幼稚園選びの際に体力とか運動について不安を持たれる保護者がいます。その方にどういうふうに言っているかという、「体力や運動能力は運動場の広さに比例するものではありません。日常生活の中で体を動かすことが大切です」。乳幼児期から適切な家庭環境を与えていかないと、体を動かすことが嫌いな子を育ててしまうという方針で、例えば雑巾がけをする時に楽しく雑巾がけをしたり、散歩をする時にでもゆっくり歌でも歌いながら、あるいは生活の中で体を動かしたり伸ばさせたりするというようなことを親と一緒にやっていく習慣がすごく重要なので、場所の広さということにこだわらないのです。

もう一つはデータの結果です。2014年度の全国体力テストの都道府県順位を見ますと、トップ県の取組には参考にする必要があるだろうということで、トップ県は福井県でした。配布資料の20ページ「総合型地域スポーツクラブ」の愛知県内の状況は、県内に131クラブが活動中って書いてありますけども、福井県は県内にスポーツ少年団が約30種で530団体あるといます。しかも小学生の加入率が23.8%（全国平均の2倍）だということです。愛知県の場合は小学生の加入率が資料には書かれてはありますが、おそらく全国平均（11～12%）程度だろうと思います。福井県出身の教員に実際のところを聞きますと、福井県にはプロスポーツチームもなければ大きな国際大会もないんだけど、大きな公園が多いといます。それから、さきほどの後藤先生の話にもありましたように、学校の教育方針が体力向上にもありまして、福井県の小学校は学力だけではなくて体力でもトップレベルを目指している雰囲気があると言っていました。また、2位が茨城県でした。茨城県には茨城大や筑波大など体育教師を目指す学生が小学校の体育の授業に積極的に参加することが理由だろうと言われています。都心の神奈川とか大阪とか東京は下位レベルです。実は北海道も下位レベルで、理由としては、広すぎてコミュニティが作りにくいからです。地域コミュニティをどうや

って作っていくのかも重要です。大村知事が気になる全国順位を上げるには、底上げのための地域コミュニティとスポーツクラブへの小学生の加入率などがポイントではないかと思いました。

3つめは、配布資料の冒頭「いつでも」「どこでも」「いつまでも」について。実は大学受験の時期は「いつまでも」が一番縮小される時期です。JR 東海エージェンシーが3年前に高校1年～3年の進学希望者（レベルは上）にアンケートを取りました。その保護者にも取りました。愛知県が中心の生徒と保護者です。「あなたは現在クラブ活動・部活動に参加していますか」という質問で高校1・2年生は「参加していない」という割合が約2割なんですけども、高校3年生になりますと56%になる。これは愛知県に限ったことではなくて、やっぱり3年生になると、どうしても、部活動に参加しなくなる。われわれ予備校としては運動なんかしないで勉強ばかりしている方が歓迎なんですけれども、これから検討される新しい入試では知識・技能だけでなく、主体性・多様性・協働性を問うていこうとしています。広い意味での学力は、クラブ活動でも育成される能力も包含され、長い目でみると、高校3年での部活動不参加には問題もあると思って、3つめのことも述べさせていただきました。以上です。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

スポーツが好きであるか、あるいは体を動かすことが好きであるかどうかは。自分も好きなんですけど、小さいときによく遊びました。自分の子らに毎週公園に連れて行かされて遊んでいました。今も、3人の子どもと体を動かしますが、本当に毎週と言っていいくらい連れて出ました。多分そういうことが、どこかに残っているのだろうと思うんですね。どうしたら好きになるかということも後で言いますが、体力の低下、よく体格が良くなっても体力が下がっているとよく言われているわけですね。体格は確かに良くなっています。足が長くなって、ただおかげで、ケガが多くなってきた。このケガが多くなってきたことが、実は以外なところに大きな影響を与えていると私は思っている。一つは学校教育なんです。屋外に出て遊んだりすることは少なくなっている。ケガのことが多いんですね。例えばですね、ある小学校の光景ですけど、土曜日に、体育館で、地元の人が子どものために体育のことをいろいろやってあげているわけです。ところがですね、子どもたちが走り回るのを止めるんですよ。ケガをしちゃいけない、ぶつかっちゃいけない。体育館なんて思い切り遊ぶ場所なんですよ。体動かす場所なのに、子どもは、ダメということではなくなっているのじゃないか、と思っているんですね。もう一つは、例えば今学校ですね。ケガをすると、大変なことが起こるために、いろんなことが配慮されている。小学校の徒競走とかも違ってきているですよ。予め速さを計っておいてやるとか、実は思い切り競争させない。これには、昔、体育系の学会からクレームが出たそうで、体格とか体力の違いのある子どもに差をつけるのはおかしい、

というクレームが入って、それで、小学校でいろいろ運動会が変わってきたんだそうです。そういう説もあるのですね。確かに徒競走であるとか、例えば、昔は中学校レベルだと色々なスポーツの校外対抗試合とかいろいろやっていたんですね、そういうのも多分減ってきました、明らかに。それから、今でも思い出しますが、中学校になると毎朝マラソンさせられてですね、今、そんなことやったら大変なことになっちゃう、というふうにある学校から言われました。そういうことを含めていくと、やはりですね、なかなか学校では。山梨大学の中村教授がこう述べているんですね。運動をしたがらない原因に、外遊びが減ったこと、それから小中学校時に勝ち負けが優先されて運動が楽しいと感じられないっていうんですね。実は、勝ち負けが優先というよりは、勝ち負けさせないようにしちゃったわけです。だから、スポーツがあるいは動くことが得意な子はね、スポーツで自尊感情を高められない、自分が伸びるところを感じなくなっちゃったところに、私は大きな問題もあると思っているんですね。とにかく全体的に体力が下がった。これは、よく言われています。昔から、子どもの運動には、時間と仲間と空間と3つの「間」が必要であると言われていて。ところが、少子化で、子どもたちも塾があったりして時間が合わない、仲間少ない、それから空間がないと。そういう中であつたら当然のことながら低下してきているんです。そのことを考えていったときに、全体的に下がった中でも二極化が起こっているとよく言われるわけです。確かにやる子はやる。例えば、今子どもたちがやっているスポーツで、サッカーと野球と水泳が割と多いんだそうです。ただ、水泳も小学校4年生がピークなんです。小学校4年生から多くは学習塾に変わっていきます。それはその後の受験のための体力向上のためにやるんだそうですけども、目的は。

「アスリートのキャリア教育形成」についての調査によりますと、子どもは、やりたいことがあるが具体的に何をすればよいのかわからない、社会に出ることへの不安、競技以外やりたいことが見つからないという。保護者にそんな相談があったときに、保護者は答えられない。不安が起こるわけです。この不安があれば、子どもが、自分が得意だからやっついこうという状況にはなっていかななくなっちゃうわけですよ。今の子どもたちが全体的に体力を高めるには、時間をどうするかということと、学校教育と地域の連携。ただ、地域にほとんど遊ぶ場や活動したりする場がない。子どもに興味を持たせるときに、体育とか決まった時間の中では、子どもが興味を持たないです。子どもが一番興味を持つのは、皆さん、小さい頃を思い出してくださいよ。自分たちで集まってルールを決めて、何かやっているときが一番楽しいわけでしょ。そこに社会性も育つし、いろいろやってきたわけです。だから、私は学校で、まだできると思うんですよ。例えば、アメリカに行ったときにこういうことがありました。スポーツをいくつか自分たちで選ぶんですよ。体育の時間でも。自分たちで興味のあるのをやるわけなんです。ただ、日本の場合には、大体授業では同じことを、みんなやっていくような状況はありま

すので、そのところをですね、もう少しやっていけばいいと思うし、自分たちでルールとか自分たちで決めてくということが、子どもにとって一番興味の持てることです。この前、世界陸上をちらっと見ましたが、まあ、日本人は体格がよくなっても、だめだなあと思ってですね。あの筋肉で100mでは、なかなか勝てないなど。あれ見て子どもたちが100mの選手になろうなんて、思えないだろうと思ったのですね。先ほど、高橋さんの話を伺って、中国は最近すごく盛り上がっているそうです。たぶん層が違うんでしょうね。いろいろな活動、いろいろなことができている、小さい頃からそういう人たちが、人口も多い集まっていると。その層がですね、今我々の中にはできていない。それは、子どもたち全体の体力の低下にひびいていて、そこからアスリートというタイプに伸びるところに、ぶつかっちゃっているんだ。まあ、そんなような気がしています。できるだけ学校も、確かに、怪我とかいろいろあります。子どもたちのアンケートを見ても、「してみたいスポーツがない」とか「する時間がない」とか「機会がない」という結果が出ているけど、このアンケートの内容がおかしいんで、これやったらそう答えますよ。私、人間ドックでこの前ひっかかったんですけど、「一日どのくらいスポーツしていますか」といっても答えにくいですよ。でも、階段は歩くようにしているわけ。2階から6階まで一日5往復していますけどね、ゴルフのためなんですけどね。すなわち、結局、日常の中で子どもたちの基礎的な動きとか、体力はそういうところにやっぱりあると。それがあつた上で、そこから好きなことを選べるようなことができないと育っていかないんじゃないかということをおもっておりました。もう一つ、我々日本人は、いろんなスポーツをみても、オリンピックなんかでもそうなんですけど、外国の人と比較しても体力の差が出るわけです。日本が得意なものも何かあるわけでしょう。水泳もそれぞれやってきたわけ、それから体操もやってきたわけですね。そういう面で、愛知県が持っているものがあるわけで、その辺を含めてですね、私は強化なり興味を持たせていく方がいいんじゃないかと、そんなつもりでおります。

<漫画家 江川達也氏>

職業的に漫画家って一番運動しなさそうな職業なんですけど、実際自分もですね、振り返ると今ほんと運動しないですね。しなきゃいけないと思いながら、やっているったら散歩くらいですね。ただ、実は意外に歩くっていうのは、一番基礎にあるんじゃないかと思っていて、今の子どもって歩かないですね。特に、愛知県はトヨタがあるせいか、車社会なんで、結構歩いてない。逆に、東京の人の方が歩いていたりして、ほぼ電車ばっかなんで、僕も大学時代に東京へ行ったときに、その東京の友達と一緒にどっか行ったときにもすげー体力使って、なんでこんなに歩けるんだろうって言うくらいすごい歩いて、歩くのが大事だなと思うんですけど、でもやっぱ子どもも、歩くのが嫌いな子どもが多くて、最近ですね、一部周りで、名前ちょっと忘れたんですけど、イングリ

かなんかそういうゲームがあってですね、陣地とるんですよね。陣地とってどっか行って、要するに二つに分かれてですね、どっか行くと陣地とれて、で、こういった場所で陣地を取って、陣地の取り合いをやるゲームがはやって、これは結構年取った人の中ではやっていて、そのゲームやることで、すごい歩くようになったって人が、結構多い状況があるんですけど。世界中でやっているんですね、アラスカあたりで、一人がすごい距離を稼いで、すごい陣地を取ったりとか、陣地争いをしているゲームがあるんですけど、まあ、そういうふうにも今ね、なぜ運動しないかっていうとゲームばっかやってんですよね。俺の子どももね、ほんとゲームばっかりやって、外行けといってもゲーム、外でもゲームやっているくらいなんで。愛知県がどこまでできるかわかんないけど、学校教育の中にその携帯ゲームとその運動するっていうものを連動させるようなもの、最近だと、万歩計とかついていたりとか、あとは携帯に連動させると今日どれくらい歩いたかっていうようなことを地図に示すようなものが出てくるように、学校でもそういうものをみんなに持たせて、どれくらい歩いたかとか、どれくらい運動したかとか消費カロリーがどうみたいな、さきほど、後藤先生がおっしゃったように、ITと運動というものを結びつけたら、ある程度運動するんじゃないかなと思います。

自分も、なぜ散歩をしてるかというところちょっと地形好きで、地形を見ながら散歩をすると相当歩けるわけで、この楽しみがないと運動しないって、一番のモチベーションは運動して気持ちいいかどうかということが、すごい大事だと思うんで、自分も何ですかね体育の授業とか楽しくもない体育の授業とか多くて、ずっと水泳をやっていたんですけど、水泳とかだと楽しいんですけど、気持ち良くてね。つまり授業が多すぎるんで、さっき自分で選択させるっていうような形で、自分がちょうど気持ちいいくらいが一番能力が伸びると思うんですよね。ちょっと負荷がかかっているくらいが、一番気持ちがいいって言うか、体育の授業でも、お前今一番気持ちのいい状態なのかっていうことを、すごい重要視したかたちでの運動、気持ちよさを大事にするっていうことを優先するような運動をすると、逆にそういう選手のが伸びると思います。

後は一番足りないのは、幼児教育のうちからの遊ぶっていう部分だと思います。俺なんか遊ぶのが絵だったんで、結局運動の方へあんまり行かなかったんですけど、その遊びながら楽しさを教えるところに、学校教育とかそういう部分がシフトしていくと、かなり運動が好きになるんじゃないかな。

後は、体力落ちてんのも食べ物のせいっていうのがすごくあるような気がします。オリンピック選手でも食べるものを変えただけで、すごい成績が伸びるっていうふう聞いたことがあるんで。やっぱ、その食育とスポーツというものを連動させるようなことを、愛知県でやるっていうか、朝、朝ご飯を学校で出してもいいんじゃないかなくらいの感じがしますけどね。給食、やっぱ朝ある程度食べて動かないと、それがこう筋肉とかそういうものにつかないと思うんで、連動した給食とか、そういう体育教育をしたほ

うがいいのかな、と思いますけどね。まあ、あまり運動していないおれが言うのもなんなんですけど。

<中京大学スポーツ科学部長 高橋繁浩氏>

私は体力という意味では専門なのですが、ただ、私のやってきた体力というのは競技レベルですので、子どもたちということになるとまた少し違うのかなと思いながら、そのような中で体育あるいはスポーツに関わっている人間として意見、提案をさせていただきたいなと思います。

結果のほうは最初に説明をいただきましたように、明らかに体力テストの結果が落ちているというようなことです。やはり、好きな児童・生徒ほど体力テストの点数が高いというのも、当然かというように思いました。

そもそも、人というものは本能的に嫌なことや苦しいことは避けようとするのが常ですので、運動に対しても少ししんどいとか面倒だなというふうなイメージを持つ子たちがスポーツに馴染んでくるというのは、明らかに難しいことなのかなというように思います。大人はまだ、それこそ健康診断に行って、いろいろ注意されると働かないといけなとか運動しないといけななどは思うのですが。子どもはまず健康のためにとかですね、仲間づくりというのもあまり意識しない。

そのようなことを考えると、なかなか自らということはないので、当然大人が運動する環境を整えて、指導してあげなければいけないということになると思います。

私が思うのは、スポーツが好きだ嫌いだ、それで嫌いな子たちをどうしましょうかというよりも、嫌いになる前にまず好きにさせなければいけないなというように思います。

先日このようなお話を伺いました。遺伝子の話でしたが、運動習慣を持つ遺伝子を持つと、成人や中高年になっても運動を続けるということでした。

実際、競技スポーツの中でもですね、やはりそういった遺伝子を意識した強化というのが、現実問題取り組まれているという現状があるのですが、そういう意味では、現在の子どもたちのご両親世代というのは既にあまり運動に関心のない世代なので、なかなか今更ながらこの世代をとというのもひよっとしたら難しいのかもしれない。

ただ、私は水泳の出身ですが、実は水泳については先程もスポーツで参加している子どもたちが多いい話が出ていました。もともと前回の東京オリンピックの時に、大変な期待をされていた中で、十分な成績を残せず、惨敗ということになり、その結果を受けて、やっぱり海外では年中泳げるプールもあるし、ジュニアからしっかりと指導しているというようなことがあり、そこからスイミングスクールがどんどん増えていったというようなことを伺っております。

現在ではですね、本当にたくさん選手たちがいますが、トップクラスの選手は当然として、例えば大学生レベルでうちに所属している水泳部の子たちに「何歳から始めた」

と尋ねると、ほとんどが3歳になるまでにプールに入っていると答えます。昔はそのようなことはなかったのですが、ほとんどの子たちが3歳になるまでに。

水泳に限らず他のスポーツもそうかも分かりませんが、やはり教わらないとできないスポーツなので、子どもたちは泳げるようになりたいとか、少しでも人より速くなりたいとか思うと、先生の話を生懸命に聞こうとしますね。そういう意味では、やはり本当に小学生というレベルではなくて、もっと小さな頃から、指導というところにチャンスがあるのかなと思いました。

それこそ学級崩壊という言葉も聞いたりしますが、やっぱり幼少期に先生の話をしっかり聞く、聞いていればできるようになるとかですね、学べるようになるとかいうようなことを、物心つき始めたころからいろいろ教えられるというのは、その手法としてスポーツというのは一つなのかもしれないなというようなことを思いました。

従ってですね、確かにまあ義務教育ということを考えると小学校からということになりますが、極論を言うと幼稚園から義務教育にさせていただいて、幼稚園の運動というテーマで何かプログラムを一本化させていただいて、それを通して子どもたちのしつけと言ったら少しリストラクチャな感じがするかもしれませんが。そういった心がけとか取り組みなら何も義務教育でなくても、本当によちよちと歩きそうな子どもから幼稚園や小学校に上がる年代の子どもたちのところで、何か子どもたちにスポーツに関心を持たせるといった取り組みの仕方というのが一つあるのではないかなというように思います。

これは先程の後藤先生と共通すると思いますが、昨日東京オリンピック開催に向けたシンポジウムというのがありまして、そこに車いすバスケットの京谷さんという、元パラリンピック選手の方がお話をされていました。彼はもともとサッカー選手だったのですが、途中で事故か何かで下半身不随になり、バスケットボールに転向されました。そのチームがやっているイベントにもともと障害を持たれた車いすのお子さんが来られて、すごくバスケットを気に入ってですね、しばらくそこでバスケットをやっていたそうです。

結果、それからもう20年近くなるのでしょうか、彼は大学でアメリカに留学して、車いすバスケットをやり、なおかつ今はカナダのプロチームでプレーしているということでした。

多くの人たちはすごいねと、ハンディキャップを乗り越えてと言われますが、彼は「いや、僕は生まれつきこうなので、別にハンディキャップとは思ってないんですよ」というお話をされて。彼は、スポーツと出会うことによって、非常に心も強くなれたというお話をされていました。

やはりスポーツというのは、先程後藤先生が言われていたみたいに、体力レベルを上げるだけではなくて、このように心を鍛えるものでもあるのだろうなというように思っています。心をたくましくしてくれるものがスポーツではないかなと。

そういった意味で、少し先程の話に戻していきますと、これまでの施策として、実際にこれらは学校でやられているのかなというように疑いながらでしたが。これまでの施策で、リーフレットの15ページ、こちらのほうの平成22年、24年、25年、こちらのほうはホームページで公開という形でした。今回は愛知教育大学の森先生だと思いますが、子どもの体力向上運動プログラムというものを実施されて、そしてこの写真が載っておりますが、この写真を見て私も楽しそうだなと、きっとこういうものは大人がやってもはまるだろうなというように思っておりましたが、このようなイベントをどんどん普及させていただきたいなと。

ここではですね、それこそレスリングの吉田選手たちを呼んでですね、話題性を持たせてやっておられると思いますが、現状、例えば日本代表選手やメダリストはもちろん競技にも集中しなければいけませんので忙しいはずで、そうそう時間は取れない。

しかし、思うに子どもたちにとっては日本代表レベルではなくても、大学生のお兄さんやお姉さんが目の前で走ってくれるとかジャンプしてくれるとかもの投げしてくれるだけでもう、おそらくものすごいインパクトがある。

だから、イベントをされるのですがもっとそれを幅広く、大勢の子たちにということを考えると、そういう体育系大学と我々も協力させていただきますので、そういった人材を使ってですね、より多くの生徒たちがそれを見てスポーツを始めましたというような機会をたくさん作っていかねばならないというように思います。

もう一つはですね、先日県のスポーツ推進審議会というものがありました。子どもの体力テストっていうのをやらなければならないということでしたが、こちらのほう、体力テストで良い点数を取るとかつてはメダルがもらえたのだが、今はちょっとメダルがなくなってしまった、紙になってしまったというお話ですね。

実は私、別に日本マスターズ水泳協会の会長をさせていただいていますが、その協会では毎年1回、日本マスターズ大会を開催しており、5歳区切りで1位から8位まで全部メダルを出しています。そうするとですね、ものすごく皆さん喜ばれる。

実際マスターズっていうと若い頃やっていた人たちではないかと思われるかもしれませんが、聞くと、大体50～60歳ぐらいから始められた方が多くて、いろんな大会駆け回ってメダルを集めておられる。

だから、そういう意味でもメダルをなくしたら、多分マスターズ参加者も減るだろうなと思います。子どもにとりましては、ご褒美っていうのは非常に大きなもので、これはこの後の選手強化にもつながると思いますが、やはり子どもたちの目的はメダルがもらえるというようなことであっても、そうしてスポーツに関心を持って自分が頑張ろうと、体力レベルが上がる子たちが多くなるので、将来的にはそういった子たちがトップアスリートに育っていくことを考えますと、ぜひ、子どもにとって1個は小さいことかもしれませんが、その施策が非常に大きな成果につながることもあれば、なくす

ことによって非常に大きな損をするということもあると思いますので、ご検討いただければと思います。

あと、これも別の話でなるほどと思いましたが、まず運動部、中学校高校の運動部、文化部には入っていますが、なかなか運動部に入っていない。

例えば、うちの中京大学のスポーツ科学部でも500人が入ってきますが、かつては500人入ったら500人が体育会に入ったものが、今は250人と半分です。

だけど、そのような中で、例えばしっかりやる子としっかりじゃなくても楽しくやるという2つの応募をかけたら、結構、楽しくやりたいほうでも人が集まったという話を伺いました。だからやり方にもよるのかなと。

例えば、月曜日から土曜日までしっかりやるグループは毎日やるよと、でも楽しくやるグループは月水金だけ参加してねとかですね。

実際、現実的にやるには大変なこともあるのかもしれませんが、そういった調査結果がありましたということを知って、そういうやり方もあるのだなというように思いました。以上です。

<野村教育長>

バッジテストというのを昔学校でやっていたけど、バッジを優秀な子には与えていたのが、段々それがカードになって。

<中京大学スポーツ科学部長 高橋繁浩氏>

メダルじゃなくてバッジですか。

<野村教育長>

今や紙になっている。だんだん予算の関係で低下してきて、子供たちにインセンティブを与えるためには、そういったものが必要だというご意見もあると思いますが。

<中京大学スポーツ科学部長 高橋繁浩氏>

是非ぜひ、あの、ご検討いただければと。よろしく願いいたします。

<大村知事>

いつ頃、バッジから変わったのか。

<野村教育長>

かなり前ですけど、それがだんだん、そういうのがずっと続いてきてまして、カードを渡したりですね。

<大村知事>

カードになったのは、何年ぐらい？

<保健体育スポーツ課長>

二十年ぐらい前です。

<大村知事>

それではですね、一通り意見をいただきましたが、さらに追加ということで、江口先生からいただければと思います。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

今の高橋さんのメダルの話は本当に腹に入るなあと。家に子どもがいるんですけども、競技スキーを少しかじっているのですが、メダルをもらおうと部屋に飾ってうっとりしています。大会の大きい小さいではなく、大きい大会で小さい賞状をもらうよりも、小さい大会でもメダルをもらおうと、それを見ながら日々うっとりし、また頑張ろうという感じになるので、ちょっとしたものですけれども、やはり、効果は大きいなど実感しております。先ほどの発言で、大切なのはスポーツを好きになることだとお話をしましたが、皆様方のご発言の中で、江川さんと高橋さんのほうから、幼少期の頃が大事なのではないかというご意見がありまして、私もそのとおりだと思います。というのは、スポーツが好きだというのは、幼稚園とか保育園の子どもが、ワーとスポーツばいことをやっているのは、ほとんど皆参加していて、皆ニコニコして楽しんでやっていて、それが小学校に入る時くらいになると、自分はスポーツがあんまり得意じゃないなという子が、参加意欲が下がってきて、だんだん落ちていくという感じ、だから、幼稚園、保育園の期間、本当はその前かもしれませんが、そこら辺がポイントだと思います。その点で言いますと、私の個人的な経験ですが、私の子どもが行っていた幼稚園ですが、幼稚園を3つほど経営している所で、副業としてスポーツクラブをやっているところでした。その幼稚園はインストラクターの人たちが昼間、自分ところの幼稚園に行って、子どもたちに体育とか一緒に遊ぶということをやっていて、全体のビジネスとして、幼稚園の授業が終わったあとに、スクールバスが幼稚園まで迎えに来て、自分の所がやっているスイミングスクールに連れて行ってきて、そこでまたお金を落としてもらおうという、そういうことをやっていたわけですね。そこまでやってくれると、子どもたちは、普段、慣れ親しんでいる先生たちが、スポーツクラブに行くというし、友達も皆知っているということで、楽しく時間を過ごす、確かに、私の子どもが行っている小学校は、いろいろなところから来ますけれども、その幼稚園から来た子は、その後、ず

一とスポーツをやり続ける率というのは、恐らく高いたらうと思います。それは、たまたま、幼稚園の学校法人がスポーツクラブをやっていたから良かったのですが、可能かどうかよくわかりませんが、公立の保育園とかにも、自分のビジネスチャンスを広げたいスポーツクラブとか、スポーツショップ、具体的に言うとアルペンとかヒマラヤとかのスポーツ用品を売っているところ、そういったところが、何か、幼稚園や保育園の子たちにスポーツをさせることによって、自分たちの先々のビジネスにつなげていこうというインセンティブで、流行るうちからのスポーツ体験というのを積み重ねていく、スポーツ関連の事業者にとっても良い話であるし、子どもたちにとっても良い機会をもらえるということで、ハッピーだと思いますので、なかなか現実にやっていくというと、障害があるかもしれませんが、そういうような方法も考えていってもいいのかなというふうに思っております。

それから、もう一点、スポーツの競技者の方の話でございますけれども、オリンピックの選手を各県ともよりたくさん排出したいということは分からないでもないのですが、はたして、自分の県からオリンピック選手を出すことが、地域のスポーツ振興に結びつくかどうかというのは、違う点があるのではないかと考えています。私は、先ほど申し上げましたが岐阜県に住んでいますが、岐阜県だと有名な高橋尚子さんのご出身地で、名誉県民でいらっしゃるんですが、高橋さんは、全国的にも有名な方で、あの方が岐阜県出身だからと言って、岐阜県の長距離が活発かということそうではない。オリンピック選手というと、愛知県の浅田さんとかも同じだと思いますが、トップレベルということその人がいるからやろうというのはちょっと違うのではないかと、そうした点で言うと、岐阜の例で言いますと、岐阜県はどんなスポーツが盛んかといいますと、グラウンドホッケーがすごく強くて盛んです。マイナースポーツではありますが、ホッケーは岐阜だという意識が、岐阜県民の中に強くあって、ホッケーやっているという話を聞くと、先はオリンピックかと思うような感じがあるんですね、個人競技のトップアスリートを出すということよりも、団体競技で、ある分野でレベルをグッと上げていくほうに注力していったほうが、県のスポーツの振興にはなっていくのではないかと、その点で言うと、集団競技でメジャーどころだと野球だったり、サッカーだったり、ラグビーだったりということころだと思う。愛知県はそれぞれの競技分野でそこそこ強いですが、めちゃめちゃに強いかということ、もうちょっといけるのではないかと、いうところではないかと思っています。外から見るとそういうふうに見えます。この間、新聞を見ていたら、全然知らなかったですけども、愛知県の私立の春日丘高校はラグビーがとても強いところなんです、春日丘高校に昔、日本代表をやっていた元々トンガ代表のオトさん、今、日本に帰化されているはずですが、その方が全日本の経験もある方ですが、コーチとして指導されているらしい。そういうようにそれぞれの競技分野において、名前が通っているようなコーチを招聘してもらって、基本的に私学なら私学がやることになるかもしれません

が、そういうことをやる私学があれば、後押しをしてあげるとかというようなこと、県の高校スポーツのレベルがグッと上がる、高校スポーツの何が良いかという、例えば春日丘高校のラグビーであれば、花園へ行ったメンバーの出身中学を見ると自分の出身中学とか、近所の中学の名前が出てくると決してそれは遠いレベルの話ではない、自分も一生懸命やっているとそこに到達するかもしれない。これは野球でもそうだし、サッカーだってそういうチャンスはあるだろうし、そういうところで高校スポーツの強化、県は既にやってらっしゃるとは思いますが、トップアスリートの育成よりもそちらのほうが意味が高いかというふうに感じております。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

私自身は、スポーツは好きですが、これとって極めることもなく、あれも出来るし、これも出来るし、そこそこ出来るという感じでした。自分がいろいろなスポーツを選んできた時に何が一番きっかけだったかという、兄が一人いまして、その兄はあまり勉強は出来ないのですが、スポーツは得意だったんですね。その姿を見ていて、ちょっと格好良さを感じたから同じスポーツをやろうかと思って、兄の後を付いていったということがあります。

体力をつけなければいけないということで、運動だとか、体力作りだとか、スポーツ振興だとかという話になっているのでしょけれど、頑張っている姿を見ると、そこに向かってみたい、自分が出来なくても応援してみたいと思うのではないかと思います。例えば、サッカーや野球がそうです。自分は出来ないけど熱烈に応援する人がいます。中京大学さんがそうであるように、本当のトップアスリート、世界に通ずるような人を育てていく時には環境がそれにふさわしいものになっている必要があります。しかし、その背中を見て、その人の後を付いていく、夢を持てるという環境作りという、ハード面だけではなくソフト面も作られることが大事なのではないかと思います。

あとは、いわゆるトップアスリートの人達を見ていて、オリンピックなんかそうですけれど、すごく頑張っているけれども、この人のインセンティブは何だろうと思うことがあります。ものすごい努力に対しての対価として、賞金も含めてですけれども、十分な報酬が出ているのだろうかと思います。若い年齢で選手生命が終わると、その後の生活はどうなるのかと。40歳を過ぎても続けているプロ野球選手はすごいと思いますが、お相撲さんたちでも膝を痛めて引退していくと、その後はどうなるのだろうかと思います。スポーツを極めていくことが、生活の中でどういう意味をもっていくのか。ただ好きであるということだけじゃなくて、極めれば、極めるほど、それはいわゆる匠の世界になるので、どんな未来が広がっていくのかということをお社会が見せていかなければ、能力のある子が頑張ろうというふうにならないかもしれないと思います。同時に、隠れた才能を持っている子たちが発掘されるようなシステムも必要だろうと思います。

私は中途半端にやってきましたが、ひょっとしたら隠れた能力が自分の中にあったのかもしれないと、ふと期待することがあります。北海道の田舎育ちですが、ローカルにいたとしても本当に素晴らしいものがあつたら光っていただろうと思うので、現実には大きな勘違いだとは思っています。でも、夢を描ける部分と、将来設計として、それが職業にも通じていくのであれば、キャリアとしてどういう道筋を辿っていくべきかというような、そんな教育も必要だと思うことが一つです。

もう一つは、特別な能力を持ったわけではない人たちが、健康面も含めて、それから仲間作りも含めて、違う価値観を持って、どうやってスポーツに親しみ、運動して健康を維持していくかということです。これは、生活習慣をきちんと教えていくということがなければ無理なのかなと思っています。一般の人たちに対して、運動し続けられるような、それから健康レベルを上げていくような体力作りを継続的にやっていくためには、今の生活と運動がどう関わるのかという、将来の姿みたいなことをもっとテコ入れして教えていく必要があると思います。

余談かもしれませんが、ある人が「今はトイレが洋式になり、和式の時代と違って子どもたちの下半身の力が弱くなった」と言っていました。若者たちの踏ん張りが効かないというわけです。洋式で座るのと違って、和式では脚力が無いと耐えられない。そういう話をする人がいて、トイレに行く度にふと思い出すことがあります。これも生活習慣の一つなんですね。生活様式が変わり、便利になる中で失われていく筋力があると考えると、日常の生活を見直していかないと、基本的なところで一般人の体力や運動能力は変わらないのではないかと思います。

ともかく、頭の中では知識が付いて大事であることは分かっているわけです。もちろん、脅かしの教育が良いわけではないのですが、自分の将来を考えて、例えば健康づくりみたいなことも考えて、一般の人々には努力しないとどんな問題が生じるかということ伝える必要があります。痛みがないとわからないという意味で、子どもも大人も含めて教育の難しさを感じます。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

ご承知のように、愛知県の企業の多くは実業団を持っています。チームが様々な競技をしているんですが、なかなか実際はその運営は非常に厳しいものがあります。それと、選手の皆さんにしてみると、試合をしているのをぜひ観て欲しい。でも、やはり観るスポーツというと、プロ野球、Jリーグ、オリンピック、ワールドカップということになって、テレビに映るような試合にどうしても関心が行きがちなんですが、出来れば実業団が愛知県にはたくさんありますので、そういった所と教育委員会が連携を取っていただいて、小学校の頃から1年に1日ぐらい時間を取っていただいて、実業団のハンドボールとか、バスケットでも良いですが、様々な競技が行われていますので、そういった

生のスポーツを観る機会を作っていただくと、そういったところから少しずつ興味も出てくるし、好きなスポーツというのでも段々思い描くようになってくるのではないかなと思います。企業にお願いすれば、その機会に少しスポーツ教室みたいなことをやっていただけたらと思いますので、ぜひお考えをいただければいいなと思います。

選手の問題ですが、スポーツの選手のごことはまったく知識がありませんが、企業でも若い人が毎年入ってきます。で、最近言われるのは、非常に素直で、言うことを良く聞く。そこから、自分で主体性を持って一歩踏み出して、自分なりの形を作っていく力が無い。無いと言うとちょっと言い過ぎですが、非常に弱いのですね。やっぱり、スポーツ選手も同じでコーチや指導者の言うことだけを聞いていては、なかなか自分の殻は破れないと私は思いますし、同じようなことを2週間ぐらい前にプロゴルファーの倉本選手も同じようなことをコラムで書かれていました。やっぱり、科学的な練習も重要なんですけど、自分の頭で考えて殻を破っていくという指導もしていただく必要もあるんじゃないかと、これは素人考えですが思いました。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

大学受験の世界では、新しいテストや新教育課程科目が、2020年度入試をきっかけにどうなるのかが大きな話題になっているんです。そこに引き寄せて考えていくと、今の学習指導要領でいう「学力」には、知識とか思考力だけではなくて、「主体性・協働性」も入ります。これらの力はスポーツとの親和性が高いわけで、スポーツを通して育成していく能力観も変わらざるを得ないのではないかと最近考えるようになりました。「学力」と「スポーツ力」の共通点ってなんだろう。知識や思考力や主体性というのは、学力の3要素として捉えられていますが、思考力や主体性は、チーム競技なんかでは特にそうなんですけれども、スポーツに必要な能力ですね。忍耐力、計画力、目標を立てて推進していく実行力などもそうですが「学力」と「スポーツ力」は似ているなあと考えています。

例えば、トップアスリートのモデルとなる能力ってなんだろうというふうになった場合に、「学力」と「スポーツ力」の共通要素を全部包括的に持っていることはモデルとなりそうです。そして、トップアスリートがスポーツを引退した後の人生（セカンドキャリア）においても企業が戦力として欲しがるような、課題解決型の人間ではないかと思えます。企業や社会で様々な問題が起こっているときに、どこに問題があってどうしたら解決できるかっていう道筋が立てる人間が必要です。スポーツの世界でも同じようなことが起こっていて、単に試合に勝つとか、記録を出すとかっていうことは結果でしかないんだけど、そのプロセスとしてはそういったことを乗り越えてきているわけですよ。

「学力」と「スポーツ力」の共通要素ってまさしく、社会や企業に必要な力で、こういった力をもうちょっと言語化していく、可視化していくっていうことがこれからのスポ

ーツ人材育成では必要なんじゃないか、と思うようになりました。

配布資料の18ページ「東京オリンピックあいちの選手強化事業」の右側に「スポーツ人材育成事業」が書いてあります。連携している4大学（日本体育大学、至学館大学、中京大学、東海学園大学）の専門的な実技指導や講習会は運動能力が中心です。しかし、スポーツ人材の第2の人生（セカンドキャリア）は、全員がアスリートやスポーツ指導者の世界に行ける割合は少なく、多くの方は、一般の事務や営業（サラリーマン）や、飲食店開業や直接にはスポーツに関係ないような世界に行くわけで、そういったときに社会が欲しがる人材は課題解決型人間ですよ。ね。「スポーツ人材育成」ではそういった能力を指導していく方向性はないんだろうか。勉強よりスポーツが優れた生徒を、社会的に活躍できる人材として認めていくストーリーをつくっていくのはダメでしょうか。今年、箱根駅伝で初優勝した青山学院大の原晋監督（中京大出身）は、箱根駅伝で鍛えている学生を「ビジネスマンとしても通用する人間に育てたい」と言っています。彼は監督になる前は中国電力のスーパー営業マンで、実社会で必要な能力というのは、決してスポーツ人材とかけ離れてはいない、むしろそっちに近づけていくんだとおっしゃっています。中高生の進路選択の際、親御さんたちが心配している就職先も「スポーツ人材」のほうが可能性は高いといったストーリーになっていけば、多くのたくましい若者がスポーツを目指すのではないかと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

基本的には、子どものときに体力が劣ってくると、精神的にもゆがみが起こるし、先々良くないってことで、全般的に、子どもの体力を上げるっていうことと、その先のアスリートの養成という、そういう二面だと思っんですね。

一つはですね、あるところまでは、親御さんも小学校低学年まではスポーツさせたいとやっているんですよ。でもそれが変化してきている。周りをみても、昔は、体育教室だとか、水泳教室であるとか、サッカー教室だとかたくさんあったんです。これらは学校外でやられていて、興味ある者が参加して競争し合うわけですね。それが少し減ってきた。原因は多分は運営費用の問題とか、経営の問題とか、少子化とかあると思っんですね。これが、先へ行くと企業に繋がっていくと思っんですね。企業も、アスリートをどういうふう育てるか、あるいは、どんな役割を担っていくのか、その不安がある。そのことが、アスリートのキャリア教育で、保護者自身も不安になって、スポーツの世界になかなか送れないと、そんなことが一つあるんじゃないかと思っんです。

さきほど、高橋先生がおっしゃっていたように、私の70歳すぎの知り合いがメダルをとるために水泳で頑張っていますけれども、たぶん、メダルとか出せば頑張るんですよ。昔は、小学校はみんな賞品出していましたよね。ところがこれはいけないってことで、全部なくなったわけ。で、先ほど言ったように、小学校教育の中に競争というのが望ま

れなくなっちゃったわけ。でスポーツが好きな子どもが活躍できなくなって、スポーツだけやってもだめだっていうことになっていったという調査があります。

確かに、学校教育と学校外教育のスポーツ振興というところを分けていくべきで、ときには競争であるとか、また報酬とかもあっていいと思う。オリンピックが強いところ、ロシアとか中国が強かったのはものすごい国の援助があったからなんでしょう。日本とは数倍、あるいはもう一桁違うぐらいの。それが、日本でもやれるかどうかなんです。日本はそういうことにはちょっと抵抗を感じちゃうだろうと思うんですよね。その辺のところへ来ると、国家戦略としてどうなるか私もわかりませんが。もう少し、小中学校の頃に、自分の得意なことは何かということをもっとしっかりやれば、例えば、勤めた後、あるいは退職後もできるわけ。私、ある小学校でこういう指導したことがあるんです。それは、運動会でエントリー制度を入れたんです。いくつかの競技を自分で選ぶんです。みんな同じ競技をみんな同じように進んでいきますよね。それを例えば、走り高跳びなどをやりたい子はそれを選ぶ、それで2種目選ばせるんです。そうすると自分で選べば、失敗しても悩まないし、もっとやりたくなるんです。でも、それをやろうとしたら、実はだめになっちゃいました。準備がすごく大変なものですから。そういうことがね、自分で選んでやれた場合、もっとやりたくなるというのが人間の心理だと思うんです。学校教育がそういうことができなくても、スポーツ教室等がやっているわけです。その辺のところ、経済的にもいろいろ支援して、あるレベル以上の裾野を広げることをやっていかないと、もっと伸びてくる人への支えにならないんじゃないかという気がしています。とにかく、ある程度、学校教育の中で、自分が得意なものが一つでもあった方がいいんじゃないかと考えております。

私はウサギとカメの話をいつも授業で使っているんです。ウサギとカメの話は、努力したら勝てると、カメも。そんなのは戦前の教育だと言っている。ウサギが寝なかったら、いつも負けるの。そしたらどうするのかっていうと、カメは陸上では勝てないけれども、川で競争しようとして提案してみたら。すなわち、自分が負けないと思うところで挑戦するようなことをやっていく、それが自分で選択できていかないと、なかなか大変だということを教材で使っているんです。以上です。

<漫画家 江川達也氏>

漫画家の立場から提案するとですね、大体、小学生、漫画で流行るとですね、みんなやるんです。一時期サッカーが流行ったのは、まあご存知なんですけど、キャプテン翼がボールは友達とかいって、ジャンプで流行ったと。と、何年後かにサッカーが流行ると。スラムダンクっていう漫画があつてバスケットをやったら、バスケットの受け皿がないくせにみんなバスケットやっちゃって、で、行き場がなくなって、作者の井上さんはバスケット振興のために身銭を切ってるけどなかなかうまくいかない、ということ

があったりするようになりますね、漫画か何かで小学生のうちにこれから伸ばしたい競技っていうものを広めると、すごいモチベーションになることは確実なんですけど、それを例えば愛知県がどうするかって考えるとですね、愛知県がある程度予算を組んでですね、副読本としてですね、漫画家をコンテストで募集とかしたりして、その中でも人気があったらお金をやる、人気ないものはなし、みたいな感じで、副読本で漫画でいろんな競技の面白さを伝えるような、そういうようなものを作ったら、何年後か後には、ある程度愛知県の競技人口が増えるんじゃないかな、それが1つの提案です。

2番目がですね、この教育懇談会、そもそも高校入試をどうするかっていうところである程度始まったと思うんですけど、高校入試でですね、英・数・国・体力っていうふうに、体力である程度の点数取れるっていうふうな、全部じゃないんですけど、そういう学校を実験的に作ってですね、進学校なり、実際に勉強するにもベースの体力ない人って、最終的には長く学習できない、集中力も続かない。あと漫画家なんかペンより重い物持ったことないだろうと言われるんですけど、実は週刊連載している人で続けてやれる人って、最終的に体力がないとできないんですよ。基本的に徹夜ばかりなんです。結果ね、どんな手作業でも最終的には体力が重要になって、大体腱鞘炎になって倒れる人とか、本当にあの、トップアスリートでもそうだと思うんですけど、特殊な能力って、ある程度トップのほうにいくと最終的には体力、ピアニストに関しても要はどんなに練習していても体力ない人は落ちちゃうんですね。ずーっと練習していてもオツケな人が生き残るっていうことで、実は体力って重要で、そういう体力もきちんとあって学力もあるみたいな、そういう学校を作って、そういう入試をやってみたら、みんなそこを受ける前には勉強ばかりしていないで体力も養成するっていうふうにならなかっていくんじゃないかなと。

あと、他にですね、愛知県が今まで強いスポーツというと、水泳と多分スケートだと思うんですけど、これ基本的に愛知県が頑張っているんじゃないかと、愛知県の人たちが塾以外にも何か習わせようという気持ちがあって、それでスケートもいいかなとか水泳もいいかなっていうふうに思い始めたわけで、そういう私的な塾をどうするかみたいなところで、補助を与えたりとか、そういうふうなものを作ろうって企画をしたりっていうふうに進めていくと、その競技は、まあ岐阜はね、ホッケーですか、みたいな。何でホッケーなんですか。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

何でかな。

<漫画家 江川達也氏>

何でか分からない。誰かホッケーの父みたいな人がいたんだろうか…

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

多分そういう誰かがいたんだとは思いますがね。

<大村知事>

あれ多分、そういうグラウンドがなぜかしらあるんですよね、ホッケーする。

<漫画家 江川達也氏>

そのグラウンドつくったホッケーの父みたいな人がいるんですかね。

<大村知事>

だけど、その岐阜のグラウンド借りて稲沢のチームが練習して、それで国体優勝したんですよ、愛知県のチームが。

<漫画家 江川達也氏>

ある程度県が意図したらそれなりのものができるんじゃないかなとは思っています。

あと、最後には、やっぱり遊びが中心なんで子どもは、放課で外に行って遊ぶ人と中で遊ぶ人に分かれちゃうんですけど、もうちょっと学校が工夫して、学校構内に何かイベント的なゲーム性のあるものを作っていくというのは、意図的に、どこでやるのかは分かんないですけど、進行していくといいかなと思って。最近は何かね、脱出ゲームというのが流行ってて、何かいろんな所で、ここから脱出するためにいろいろクイズがあったり、いろんなものがあったり、それを解いて脱出するというのがそこら辺に私設であるんですけど、そういうふうに子供にゲーム性を与えながら、何と言いますか、知恵も使いながら脱出ゲーム的なもので体力もつけさせるみたいな、ある場所へ行ってこれをもって、ある場所へ行ってこれをもってというロールプレイングというか普通のテレビゲームにあるような、そういうものを使いながら子供を喜ばせながら体力をつけるっていうような。あとは普通の競技の基礎力も遊びながらできるようなものを工夫してやっていけばいいかなと思います。

<大村知事>

江川さんはあれですか、スポーツ漫画は描かないんですか。

<漫画家 江川達也氏>

まあ、野球…

<大村知事>

あんまり好きではない。

<漫画家 江川達也氏>

いやいや、僕は一応水泳ずっとやっていて。

<大村知事>

いやいや、漫画漫画。

<漫画家 江川達也氏>

漫画で。要はね、持論があって、せつかく漫画で描くのに何でスポーツ描くんだろうっていうのがあるんで、スポーツ漫画描くぐらいだったら俺スポーツやるわっていう。意味ないかなっていうね。なんで、やっぱり漫画でしかできないものを漫画にしたいっていうパターンなんですね。

<大村知事>

スポーツ漫画描かれませんか。

<漫画家 江川達也氏>

描かないですね。水泳も描かないなあ。

<大村知事>

どう思われます、スポーツ漫画は。主力でしょ、やっぱり漫画の世界で。

<漫画家 江川達也氏>

少年ジャンプで描いてた時に、まあ、スポーツ物を出してくるとまあまあ人気は上がりましたね。でも、ずっとスポーツ物を描いていると、自分が飽きてきちゃうぐらい。それほどスポーツ漫画好きじゃない。だって、描いているぐらいだったら、やったほうがいいじゃないですか。水泳ずっとやっていて、水泳の指導員もやっていたんですよ。前畑さん、千代田スイミングスクールで。俺ね、一応県大会は出ました。指導員の免許も持っていて、あの、こんな体ですけど、今は三角形ですけど昔は逆三角形で。千代田スイミングスクールっていうのは守山区にあるところで、ちゃんと教えていて、前畑さんも一緒に教えていて、もうすごいご老人だった前畑さんと一緒に子供を教えていたんですよ。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

うちの子も教えてもらっていたかも。千代田スイミングスクールで。

<漫画家 江川達也氏>

えっ、ほんとに。じゃあ俺教えていたかも。まあまあまあ、あの、僕自身は比較的水に慣らすところが上手で、いかに面白くして水が怖い子供を好きにさせるかっていうのにすごい気を配っていましたね。一つの成功を収めていましたよ。

<大村知事>

だったら水泳の漫画を描けばいいじゃない。

<漫画家 江川達也氏>

漫画の世界では、大体水泳の漫画は失敗っていう、あんまり読者がいないんですね。あえて何かトビウオターンとか昔のやつで、あれは、オリンピックが近づいて、そこが有望になると、例えばバレーボールが有望になるとバレーの漫画が流行ったりとか、やっぱりそういう方向なんで。水泳はつままないんですよね、面白みがないんで。やっぱり格闘技が一番流行ります。次に球技なんで。

<大村知事>

野球ですか、やっぱり。

<漫画家 江川達也氏>

野球はベースで流行るんで、水島新司さんは、野球は絶対にいいっていうことで野球ばかり描くようになってちゃって、ドカベンも最初は柔道漫画だったのに野球漫画に途中で変わってしまったという。どういう話かよく分かんなくなっちゃった。まあでも漫画は影響力があるってことですね。

<中京大学スポーツ科学部長 高橋繁浩氏>

私は競技力の強化に向けたというところで話をさせていただきますが、まずは愛知県のほうでも強化選手に対する競技力強化事業というのを創設していただきましたが、他の県がどういう取組をしているのかという現状を把握する必要があるなと思います。実際、もう10年以上になりますかね、福岡や和歌山県のほうではタレント発掘事業ということで展開されておりますし、当然、その後東京オリンピックが決まったわけですので、どの県もうちの県から代表選手を輩出するんだというふう息巻いているはずですので、単純に強くするぞと手を挙げてもなかなか簡単には強くならないかなというふう

に思うわけなんです。

その中で、県としては、あれは体育協会の目標であるんですかね、次のオリンピックに40人輩出して、ぜひ東京では80人というふうな人数が出てきているわけですが、ある意味、もう少しそのへんを具体化していくことが必要かなというふうに思うんですね。例えば水泳や陸上では5名以上は出してよとか、レスリングさんはメダル獲れるんで金メダルを含めたメダル3つはお願いしますよとかね、こういったプレッシャーをかけるということも、ちょっと具体的な目標を設定するというのも必要になってくるのかなと。

また、必ずしもメジャー競技だけが狙えるというわけではないんで、やっぱりオリンピック種目の中で、メジャーではない種目でもチャンスのある種目というものはあるわけですので、そのへんの分析等も必要になるかなというふうには思っております。

また、コーチやら選手やらあるいは父兄を対象としたスポーツ講習会の開催というのがいろいろ予定されているんですが、もちろん選手が競技をするわけで、その支援者としてコーチがいるわけなんですけど、現状はどうか実際は、各競技団体ごとにはトレーナーさんとか理学療法士さんとか栄養士さんとか、このへんのサポートというのは非常に重要で、それぞれがそれぞれにお願いをして張り付けていただいているという現状があるかもしれませんが、このへんも阿久比の科学トレーニングセンターを中心に、こういった人たちの連携もうまく考えていただいて、共通した認識の下に各競技団体でさらに幅広く伝わるような体制を作り出していくというのがとても重要かなと思います。

実はこのような傾向がありますというのが、3年前はロンドンオリンピックがありました、もちろんその4年前には北京オリンピックがあったんですね。当然、それぞれの国が自国開催ですので、良い成績を収めようということですね、競技力強化にいろいろ努めているわけなんですけど、もちろん活躍はしています。ただ、その時の体制を作ったことがその後も活かされているわけですので、実際、それこそ今年あった世界陸上や世界水泳もですね、水泳のほうで言いますと中国の選手やイギリスの選手が結構活躍してきてるんです。したがって、この2020年に向けての強化というのが、2020年で終わるのではなくて、その後ももちろん継続してスポーツの強い愛知というのが継続していくような体制を作り出していくということが、とても大切になってくるのかなというふうには思います。

また、資料の中に今年度これから開催される大会が、19ページですね、今年10月、あるいは2020年まで国際大会並びにその予選会や全日本大会が開催されるというふうなことになっているわけですけども、やっぱりこのような大会をできるだけうまく利用してですね、県民の方々にも観戦していただいたり応援していただいたりというのは当然のことなんですけど、先程、柴山さんのほうですかね、実業団の大会にも見に来てくださいというのがあったんですけど、おそらくですね、ルールが十分分かっていないというふうなことがその要因としてあるんじゃないかと思うんですね。それこそ、うちの家の

娘の話で恥ずかしい話なんですけど、5年程前ですかね、中京高校が甲子園で優勝する時に、高校として応援に行ってるんですね。うちの娘、全然野球に興味ないんですが、中京高校生だったものですから行きましたと。そして甲子園に行って、いよいよあと1球で終わると、あと1人で終わるというコールが、「あと1球！あと1球！」って言ってピッチャーが1球投げたのに何で終わらないのっていう電話が、ボールなんですけども、私、スポーツやっているので信じられないんですが。その世紀の一瞬を楽しめないっていう人間て少なからずいてですね、実際私もニュージーランドとかオーストラリアとかでクリケットとかいう競技が非常に盛んで、丸一日や二日やっていると思うんですが、何が面白いのかなと思うんですね。やられた方がいると申し訳ないんですが、我々は30秒、1分で終わる競技なものですから。だから、ルールを知らないとやっぱり見ても面白くない。やっぱり大きな大会を迎える前に、愛知県には素晴らしい施設がたくさんあるので、そういったところに行ってもですね、ルールを知らないとかあんまり興味のない人たちが、あるいはちょっと見てみようかなって気になるような、そういう何か事前にとか会場でルール説明をするとかですね、何かそういう見て楽しめる工夫というのは必要なのかなっていうふうに思うんですね。

それと、これは水泳を例に挙げるんですが、実は1999年、オーストラリアのパースで世界選手権が開催された時に、やっぱりこういった大会になると実際1週間ぐらい開催されます。もちろんそれは競泳だけで、シンクロ、水球っていうと大体2週間ぐらいの開催になるんですが、さすがにですね、平日の午前中にやる予選というのは人が集まらないんですね。ただ、大体夏のスポーツというのは子供たちは夏休み中なので、子供たちはオッケーと。お母さんもその子供たちを連れてこれる状況にはあるんですね。そうすると、予選、実は会場に子供たち、お母さんがいっぱいいるんです。どうしてかという、予選が終わった後に、選手たちが引き揚げて、役員も引き揚げるんですが、予選を応援していた子供たちが、そのあと一斉に水着に着替えてプールサイドにダーっと降りてくるんですね。そこで4人1組のリレーをやるんです、200メートルリレーを。タイム取るのはそれぞれ所属のクラブのコーチが取るんですが、子供たちにとってはさっきまで超一流の選手が泳いだプールで今から自分が泳げるというようなことにワクワクしてですね、水着に着替えて待ってるわけなんですね。こういうイベントのやり方ってすごく上手だなと思ひまして。やっぱりそこで泳いだ、オーストラリアは元々水泳が盛んなところなんですけど、やっぱりその子たちは夢を持ってですね、僕も将来、こういったところで泳げて、こういったところでそれこそ表彰台に上げられるような選手になりたいなっていうふうにきつと思うんだらうなと思ひます。また、そういったトップクラスの選手たちや、それからいろんなプールがあるんですが、そこでの合宿なんかでもですね、一般の市民の人たちもいつでも覗けるような環境であって、合宿しながらも隣の2レーンぐらいは一般の人たちも泳いでいるんですね。その人たちはこういった選手の泳ぎを

目の当たりにしてですね、水中を覗きながらものすごい楽しんでいる。選手たちも気軽に声かけられることに対して対応しているという姿を見て、やっぱり市民の人たちも応援できるという環境もできあがっているなど感じました。それこそ先日、北京で世界陸上があったんですが、実際にアメリカチームは千葉県で事前合宿をしたそうなんです。千葉県と順天堂大学さんが連携をして、アメリカチームのほうも非常に日本人のおもてなしを気に入って、ぜひまたと言っている。だから、なかなかこういった選手たちを目の当たりにすることであるとか、結構選手たちってというのはそんな、まあプロサッカーとかになると撮影禁止だとかゲーム性があるのは厳しいのかもしれませんが、必ずしもそういうものだけではなくて、選手と触れ合うきっかけがあったりだとか、機会があったりだとかっていうふうなことが、子供たちが見学するとかいったことも可能だということ、本当にイベントを通してそのスポーツに興味を持っていただけるというふうなこと、あるいはイベントのやり方っていうのを工夫すると、皆さんがもっとイベントたくさん来ると楽しいねというふうなものですね、間接的にはやっぱりスポーツの好きな子ができてくる、あるいは応援してくれるというふうなことによってやっぱり競技者が育っていくということに繋がっていくのではないかなというふうに思います。それぞれの競技団体がそれぞれの強化をしてくださると思いますが、その環境づくりであるとか、せっかく素晴らしい施設が愛知県にはいっぱいあると思いますので、こういった施設を有効に利用していくということもお考えいただければなというふうに思いました。

<大村知事>

ありがとうございました。ちょうど時間がまいりました。皆様にたくさんご意見をいただきました。ありがとうございました。

2020年のオリンピック・パラリンピックに向けてということは勿論ですが、それだけで止まらずに全体のスポーツの振興、そして子どもたちの体力向上、またその他、きめ細かくしっかりやっていければと思っております。

ちなみに愛知県というのは、人口も750万人おりますから、企業もたくさんおりますので、国体は常に上位にきまして、プロ球団もありますし、国内では相当レベルが高いところだと思いますが、特徴をみると高校までは非常にどの種目も強いと、ただ大学になると、高橋先生には申し訳ないですが、関東の私大にみんな行ってしまう、どこも、どの種目もそうですが、もちろん中京大学の水泳だとか、得意種目は頑張っていると思いますが。また、大学を出ると、こちらに企業がたくさんあって、不景気が何回か続くと企業のチームが手を放つ選手を全部トヨタグループが引き受けて、ますます増えてくるということで社会人も強いと。だから、去年の国体は天皇杯、皇后杯ともに3位。開催県が1位で、2位が東京で、3位が愛知ですから、非常に分かりやすいのですが。

いずれ東京を抜いて2位になりたいと思っておりますが、それはそれとしまして、そういったことも含めてしっかりやっていきたいと思っております。

ちなみに先ほどの19ページの今後予定される国際競技大会ですが、今日午前中に2018年の夏に女子ソフトボールの世界大会を誘致したいと正式に名乗りを挙げさせていただきます。野球・ソフトが正式種目となりますと、2020年のオリンピックの予選も兼ねるということで非常に盛り上がるのではないかと考えています。もちろん、これから国内での調整ということもございます。そういったことも含めて、しっかりと盛り上げていきたいと思っております。

今日いただきましたご意見、ご提案などについては、今後の「教育に関する大綱」、また、「振興基本計画（アクションプラン）」などにも活かしていきたいと思っておりますのでよろしく申し上げます。長時間にわたりまして、ありがとうございました。また、よろしく申し上げます。